

第6学年1組 国語科学習指導案

令和5年9月29日（金）第5校時

- 1 単元名・教材名 作者の生き方と重ねて読み、作品の世界を伝えよう
～宮沢賢治からのメッセージ～
「やまなし」「イーハトーヴの夢」

2 児童の実態と本単元の意図

(1) 児童の実態

(略)

(2) 本単元の意図

本教材は、小学校学習指導要領 C 読むこと (1) オ「文章を読んで理解したに基づいて、自分の考えをまとめること。」を重点目標としている。

本教材は、「私」による一人称視点で書かれた外枠と、三人称の客観的な視点で書かれた「五月」「十二月」の2枚の幻灯という額縁構造になっている。「かへの兄弟」「ものの落下」「川底」など共通しているものが描かれている一方で、かへの兄弟の様子、かわせみややまなし、情景描写など、「五月」と「十二月」を対比することで、「奪われるものと与えるもの」「生と死」などの宮沢賢治の世界を読み取ることができる文学的文章である。

作者の幻灯を表したものであることや、作者による造語、比喻表現、擬音語、擬声語が数多く使用されていることから、初見で文章の内容を理解することは困難な教材である。宮沢賢治の生き方や人間性を知らずに読むと、作品やそこに込められた思いを理解することが難しい。そこで、補助資料「イーハトーヴの夢」で描か

れる作者の生き方や考え方に触れ、作者独特な表現を味わい、なぜ「やまなし」が題名なのかを考える。作品を読んでも理解しにくい宮沢賢治の世界観が、「宮沢賢治」という人物を理解することで、作品の中にその背景とのつながりを見出し、より賢治作品のおもしろさを感じることができるようになる。自分がこの作品を読んで何を感じ、何を考えたかをまとめ、作者が作品に込めた思いに迫る。作者の深い自然観や生命観への理解を背景に、宮沢賢治の作品をどう読んだのかを書く活動は、児童が作品を解説し、評価するという論理的な思考を伴う活動でもある。

身に付けさせる資質・能力

- ・ 作者の表現によって、どのような作品世界が生まれているかを考える力
- ・ 作者の生き方や、他の作品の書かれ方と関連させて、考えを深める力

本単元の指導にあたっては、3つの段階で指導を展開していく。

第1次では、学習の見通しをもつ。まず、単元のめあてや学習計画を理解し、見通しをもって「やまなし」を読めるようにする。単元扉にあるリード文から、情景を思いうかべる活動や作品世界を捉えて考えを書く活動のイメージを具体的に示したり、視点や物語の構成といった既習経験を想起させたりして、学習の見通しをもたせる。また、学習のゴールも示す。図書室に宮沢賢治の作品を紹介するコーナーをみんなで作り、宮沢賢治の生き方や考え、作品に込められた思いを5年生に伝える活動を行うことを知らせる。

第2次では、作者の生き方に触れ、作品の世界を深く理解させるために、作者が本教材「やまなし」に込めた思いに迫る。まず、資料「イーハトーヴの夢」を読み、宮沢賢治の生き方や考え方を捉えさせる。また、今月の詩として提示した「雨ニモマケズ」にも触れ、宮沢賢治の理想についても理解させ、「やまなし」の深い読みにつなげる。ここでは、宮沢賢治作品に影響を与えていると考えられる以下の3つの出来事を丁寧に捉えさせる。

- ① 「石こ賢さん」 …表現の美しさ、様々な鉱物、色の表現
- ② 「自然との共存」 …世界全体の幸福⇔残酷な現実
- ③ 「賢治の最期」 …人のために、つながる死、与える命

次に、「五月」と「十二月」に書かれている情景描写や比喻表現に着目させ、その効果と工夫について気付かせる。そして、「五月」と「十二月」を比べながら、それぞれの幻灯で宮沢賢治が伝えたかったことを考える。それをもとに作者が「なぜ題名を『やまなし』にしたのか」を考えさせることで、作品に込めた思いに迫る。

第3次では、これまでに学んだことを生かし、自分の考えを表現するために宮沢賢治の他の作品について紹介するカードを作成する。並行読書として読んできた作品を、宮沢賢治の生き方や考え方を踏まえながらも一度じっくり読ませ、表現に着目させながら紹介カードにまとめさせる。そして、児童同士で交流させ、自分の考えと比べながら感想を伝え合う。完成したものは、図書室の宮沢賢治コーナーに掲示し、他の学年にも見てもらうことで、児童の達成感につなげる。

3 研究主題との関わり

研究主題『確かな学力と豊かな心を育てる国語教室』
～生きて働く力を育てる指導法の工夫～

本研究で目指す「確かな学力と豊かな心が育っている児童」とは、「生きて働く力を身に付けている子」である。「生きて働く力」とは、「学習の基本となる確かな国語力を身に付け（語彙力）、自分の思いや考えを、伝え合いや学び合いを通して広げ深める力（表現力）」と考える。そのためには、児童の実態を正しく把握し、年間を通して確実に指導事項が身に付くように、単元を通して付けたい資質・能力を見極め、言語活動を通して指導して

いく。

そこで、本単元では、次のような手だてを考えた。

仮説①

基礎的・基本的な知識・技能とその単元を通して付けたい資質・能力を明確にする。その力を付けるための言語活動を設定し、主体的に文章を読み、学ぶ楽しさを味わうことにより、確かな学力と豊かな心が育つであろう。

〈 手だて 〉 ○宮沢賢治作品の紹介カードの作成

本単元では、宮沢賢治の生き方や考え方を踏まえて、「やまなし」の世界を捉えることのおもしろさを味わい、自分なりの読みを深める。そして言語活動として、宮沢賢治の他の作品を読み、作品に込められた思いを考えて紹介する活動を行う。その際、図書室に宮沢賢治コーナーを作り、5年生に手に取ってもらえるように工夫させる。

「イーハトーヴの夢」で紹介されている、「風の又三郎」「グスコブドリの伝記」「セロ弾きのゴーシュ」の3つの作品の中から1つを選び、並行読書に取り組みさせる。宮沢賢治の生き方や考え方を授業で扱った後に、もう一度自分が選んだ作品を読むことで、宮沢賢治やその作品に対する理解をさらに深めることができる。

この単元のねらいやゴールを始めに伝えたり、単元の途中でもねらいを確認する場を設定したりして目的意識をもたせることで、単元を通して主体的に学習に取り組むことができ、主体的に学び、学ぶ楽しさを味わうことにより、生きて働く力が育つと考える。

仮説②

相手意識・目的意識をもった学習活動を工夫する。協働的に学び合う場を設定し、互いの思いや考えをいきいきと伝え合い、考えを広げ深めることにより、確かな学力と豊かな心が育つであろう。

〈 手だて 〉 ○児童同士の対話を通して学んだことを自分の言葉でまとめる活動の設定

作者の生き方や考え方をもとに作品の世界を捉える活動は、多くの読みや解釈が存在するものである。そのため、本単元でも、宮沢賢治の生き方や考え方を同じようにおさえても、児童によって異なった読みになることが予想されるが、その違いがさらに児童同士の読みを豊かにすると考える。そこで、本単元では、一人一人の考えが視覚的に分かるような交流を行う。ICTを用いて大型モニターに全員の考えを映し出し、そこから考えを整理していく。似ている考えや異なる考えを児童の言葉でつないでいき、多くの意見に触れさせることで自分の考えを深めさせたい。

また、過去の埼玉県学力・学習状況調査や全国学力・学習状況調査において、自分の言葉で表現する問題に対して解答できず空欄となる児童が多い。国語だけでなく、算数においても、解き方が分かっているにもかかわらず、理由や考え方を問われると説明できない児童が多い。そこで、本時のねらいに迫るための協働的に学び合う場を設定し、そこで学んだことをもとにその日の授業の「まとめ」を自分の言葉で書く活動を行う。それにより、児童の「ただ黒板を写せばいい」という考えを、必要感をもって「理解したい、学びたい」という考えに変容させることができる。また、この活動を行うことで、協働的な学び合いを通して、主体的に自分の思いや考えを整理し表現することができるようになり、生きて働く力が育つと考える。

4 単元の目標

- (1) 比喩や反復などの表現の工夫に気付くことができる。 (知識及び技能) (1) ク
- (2) 「読むこと」において、人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることができる。 (思考力、判断力、表現力等) C (1) エ
- (3) 「読むこと」において、文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめることができる。 (思考力、判断力、表現力等) C (1) オ
- (4) 言葉がもつよさを認識するとともに、進んで読書をし、国語の大切さを自覚して思いや考えを伝え合おうとする。 (学びに向かう力、人間性等)

5 本単元で取り上げる言語活動

物語を資料と重ねて読み、作品の世界について考えたことを書く。

(関連：C 読むこと 言語活動例イ)

6 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
① 比喩や反復などの表現の工夫に気付いている。((1) ク)	① 「読むこと」において、人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりしている。(C (1) エ) ② 「読むこと」において、文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめている。(C (1) オ)	① 表現や構成等に注目して作品世界を捉えることに粘り強く取り組み、学習の見通しをもって自分の考えを書こうとしている。

7 単元の指導と評価の計画 (全9時間)

次	時	学習活動	学習内容	指導上の留意点・評価
1	1	○単元扉を見て、学習への意欲を高め、本単元の見通しをもたせる。 ○「やまなし」を読み、初発の感想を書く。	○学習課題の確認 ○学習のゴール ○感想の書き方○単元全体の見通し	○学習のゴールとして、「宮沢賢治の生き方や理想についての自分の考えを書く」ことを伝える。 ○初発の感想では、「内容について」と「文の書かれ方・表現」の2つの項目に分けて書かせる。 ○初発の感想で「疑問に思ったこと」をもとに学習計画を立てる。
2	2	○「五月」に描かれている風景を、簡単な絵や図に表し、あらすじをとらえる。	○比喩表現 ○情景描写 ○色の表現	○ノートに水面と川底を描き、時系列の流れとともに、出来事や比喩表現を加筆しながらあらすじをつかめるようにする。
	3	○「十二月」に描かれている風景を、簡単な絵や図に表し、あらすじをとらえる。		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【知識・技能①】 <u>ノート</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・比喩や表現上の特色を捉え、絵や自分の言葉で表すことができているか確認する。 </div>

	4・5	○「イーハトーヴの夢」を読み、宮沢賢治の生き方や考え方について話し合う。	○伝記の読み方 ○人物の生き方や考え方の捉え方	○宮沢賢治の生き方や考え方が表れている出来事を年表にまとめさせる。 ○書き出した出来事から、宮沢賢治の生き方や考え方を考えさせるようにする。 【思考・判断・表現①】 <u>ノート・発表</u> ・宮沢賢治の生き方や考え方について考え、まとめているかを確認する。
	6	○「五月」と「十二月」の場面を比べ感じたことや考えたこと、賢治が伝えなかったことをまとめる。(一人学び)	○比喻表現 ○オノマトペ ○根拠の提示の仕方	○「かへの会話や様子」、「水や光の様子」、「上からきたもの」に着目させ、自分の考えをノートにまとめさせる。 ○「賢治が伝えなかったこと」が一番分かる部分についてオクリンクのカードにまとめさせる。
	7 (本時)	○「五月」と「十二月」の場面を比べ、なぜ「やまなし」という題名にしたのかを考える。	○題名の解釈の仕方	○前時にまとめたものをもとに、班で話し合い、考えを深めさせる。 ○全体で交流したことをもとに、題名に込められた思いについて個人でまとめる。 【思考・判断・表現②】 <u>ノート・発表</u> ・表現の効果や題名に込められた思いを考え、作者が伝えなかったことを捉え自分の考えをまとめられているか確認する。
3	8	○「イーハトーヴの夢」の中で紹介されていた宮沢賢治の作品について、紹介する文章を考える。	○紹介カードの書き方	○前時で学んだことを生かして、並行読書の紹介をさせる。 ○図書室に掲示することを意識させて取り組ませる。 【思考・判断・表現②】 <u>紹介カード</u> ・既習事項を使いながら作者が作品に込めた思いを自分の言葉で紹介できているか確認する。
	9	○書いた文章をグループで読み合い、感想を交流する。	○交流の仕方	○お互いの共通点や相違点に着目させ、アドバイスを伴う加筆をさせる。 【主体的に学習に取り組む態度①】 <u>感想・観察</u> ・自分の紹介カードと比べながら感想を語り合ったり、よりよいものを目指して、加筆したりしようとしているか確認する。

8 本時の展開(7/9時間)

(1) 目標

文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめることができる。

(思考力、判断力、表現力等) C (1) ㉔

(2) 評価規準

「読むこと」において、文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめている。

【思考・判断・表現】

(3) 展開

学習活動	学習内容	指導上の留意点・評価	時間
1 既習の学習を振り返る。(音読)	○前時までの学習の想起 ○音読	○前時に一人学びでまとめた、「宮沢賢治が『五月』と『十二月』に込めた思い」を確認し、その根拠となる文章を音読させる。	3
2 学習課題をつくる。	○課題づくり	○教科書 P126 の「たいせつ」を見て、「題名のつけ方」に迫ることが目標であることを確認し、児童と一緒に課題をつくる。 ○課題についての予想を書かせ、まとめと比較してどのように学びを深めたか分かるようにする。	1
賢治は、なぜ「やまなし」という題名にしたのか考えよう。			
3 「五月」「十二月」でそれぞれ賢治が伝えたかったことは何か全体で交流する。	○全体交流の仕方	○「五月」と「十二月」のそれぞれで賢治が伝えたかったことを捉えることで、本時の課題に迫れることを確認する。 ○前時に一人学びでまとめた「賢治が伝えたかったこと」についてオクリンクで集約しておくことで、全体交流が円滑に行えるようにする。 ○オクリンクで使用するカードは、根拠となる表現がどこにあるか一目で分かるように、全文プリントの何行目かを書けるようにする。 ○賢治の生き方とも大きく関わるため、「イーハトーヴの夢」「雨ニモマケズ」の中からも理由を探せるように声かけを行う。	20
<p>〈期待される児童の反応の例〉</p> <p>「五月」</p> <p>【かのにの会話や様子】</p> <ul style="list-style-type: none"> ①L4、②L5のかのにの会話から、賢治は自然のこわさを伝えたかったと思います。理由は、笑っていたものが突然、殺されたと表現しているからです。 <p>【水や光の様子】</p> <ul style="list-style-type: none"> ②L21の光の様子から、賢治は自然の厳しさを伝えたかったと思います。理由は、夢のように広がっていた日光の黄金が突然、まるっきりくちやくちやにされてしまったからです。 <p>【上からきたもの】</p> <ul style="list-style-type: none"> ③L16のカワセミと魚の様子から、賢治は死への恐怖を伝えたかったと思います。理由は、穏やかな描写から、突然命が奪われていくからです。 <p>「十二月」</p> <p>【かのにの会話や様子】</p> <ul style="list-style-type: none"> ⑦L11～13のかのにの会話から、命は巡っているということを伝えたかったと思います。理由は、命を終えたやまなしが他の生き物の恵となっていたからです。 <p>【水や光の様子】</p> <ul style="list-style-type: none"> ⑤L4の光の様子から、賢治は自然の美しさを伝えたかったと思います。理由は、ただも石ころも、きれいな美しい表現で表しているからです。 <p>【上からきたもの】</p> <ul style="list-style-type: none"> ⑥L18のやまなしの様子から、賢治は命のつながりを伝えたかったと思います。やまなしがそうだったように命はなくなっても、他の生き物に恵や幸せを与えることができるからです。 			

<p>4 課題についての自分の考えを書く。</p> <p>5 グループで課題についての考えの交流を行う。</p> <p>6 学習のまとめをする。</p>	<p>○考えの書き方</p> <p>○交流の仕方</p> <p>○作者が題名に込めた思い</p>	<p>○話し合いで自分の考えを伝えるために、交流の前に個人で考える時間をとり、ノートにメモをさせる。</p> <p>○異なる意見や考えをノートにメモさせて、自分で考える際に生かせるようにする。</p> <p>○「五月」と「十二月」で賢治が伝えたかったことをもとに、本時の課題である、なぜ「やまなし」という題名にしたのかを考える。</p> <p>○全体でも交流を行い、それぞれの捉え方の違いにも気づかせ、作品を読むおもしろさを味わわせる。</p>	<p>5</p> <p>8</p> <p>7</p>
<p>「やまなし」のように誰かのためになる生き方は賢治の理想であったから題名を「やまなし」にした。</p>		<p>〈評価規準〉 【思考・判断・表現②】 〈評価方法〉 話し合いの観察・発表・ノート 作者の生き方や考え方を踏まえ、題名を「やまなし」にした理由を考えている児童を B 評価とする。 〈「努力を要する状況 (C)」への手だて〉 ・前時でまとめたノートをもとに、項目ごとに整理して考えるように助言する。</p>	<p>1</p>
<p>7 本時の学習を振り返る。</p>	<p>○振り返り</p>	<p>○本時の学習に沿って、振り返らせる。</p>	
<p>〈期待される児童の振り返り〉 題名には、賢治の理想の生き方や思いが込められているということが分かった。</p>			

9. 板書計画

<p>ふ</p>	<p>ま</p>	<p>現実</p> <p>↑</p> <p>対比</p> <p>↓</p> <p>理想</p>	<p>自然の雄大さ ↓こわい出来事があったとしても変わらず自然はそこにあるから。</p> <p>自然の厳しさ</p> <p>生きることの厳しさ ↓突然さつきまで生きていた魚が食べられてしまったから。</p> <p>五月</p> <hr/> <p>命はめぐるといって、命はめぐりめぐって、繰り返されているから。</p> <p>十二月</p> <p>人のために命の限り尽くすこと。 ↓最後まで誰かのためになるような生き方を理想としているから。</p>	<p>め</p> <p>なぜ「やまなし」という題名にしたのか考えよう。</p>	<p>やまなし</p> <p>宮沢賢治</p>	<p>長月 二十九日(金)</p> <p>作品の世界をとらえ、自分の考えを書こう</p>
<p>「やまなし」のように誰かのためになる生き方は賢治の理想であったから題名を「やまなし」にした。</p>						